

---

# 人々の研究

○

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人々の研究

### 【Nコード】

N1836C

### 【作者名】

○

### 【あらすじ】

高校生のワンダフルライフを描く研究シリーズ連載開始。行き当たりばったりで何処までいけるか。

## 第1話：始まりの研究

とある高校。入学式からまだ間もない教室。

まだ慣れていない生徒同士の、誰か喋れよ、というよく意味のわからないプレッシャーで誰も喋らない教室。

授業中はもちろん、休み時間も静か。

そんな状況をどうにかしようと、立ち上がった人間がいた。

身長は170弱、短髪できりつとした眉と目が活発そうな印象を人に与えている。

名を安藤雄二という。出席番号一番だ。

雄二としては、休み時間に少し騒がしいくらいの喧騒が欲しかった。クラス全員が次の授業の準備をして、自分の席に座ったまま喋らずじっとしている今の状態は耐えがたい。

まず自分が誰かに話し掛けたことをきっかけにして、クラスに会話を定着させる。そういう計画の元、話し掛けやすそうな相手を探した。

雄二の目にとまったのは、自分の席で何かの本を読んでいる生徒だった。

身長は160弱、ふわつとした髪とくりくりした目が幼い印象を与えている。へたすると中一でも通るかもしれない。

その生徒の名を森本芳樹という。

話し掛けるにあたって雄二は、綿密なシミュレートを行った。

- 1．まず読んでいる本の題名を尋ねる。（つかみはOK）
- 2．それから本の内容について聞く。（話のきっかけを作る）
- 3．本の内容について少し語り合う（ここはアドリブで）
- 4．駄目元で本を貸してくれと言ってみる。（これで次の会話をキープ）

完璧だ。さつそく雄二は次の休み時間に計画を実行する事にした。退屈な授業が終わり、沈黙に包まれる教室。雄二は一回の深呼吸と共に行動に移った。

ギクシャクとした動きで芳樹の席の前に向かう雄二。休み時間にトイレ以外に移動する人間が珍しいため、教室中の注目を浴びてしまっている。教室を包む妙なプレッシャーは、雄二の精神と肉体に微妙な緊張を強いていた。

どうにか芳樹の席の前に来た雄二。本を読んでいた芳樹は、机の前に来た誰かに気付いて顔を上げた。

今がチャンス。教室が二人に注目している中、雄二の計画が始まる。

「あ、あのさ、なんていう本を読んでるの？」

「これ？ 若奥様の蜜壺」

雄二の脳内に最大級の緊急警報が鳴り響く。すみやかに話題を変えて軌道修正するべき所だが、微妙に緊張している今の雄二はうまく対応できない。

「へ、へー、どんな事が書いてあるの？」

「えーと、若い人妻の淡いヘアをかきわけたら蜜のあふれる」

引き続き雄二の脳内に最大級の緊急警報が鳴り響く。というか、さつきよりも激しい。いくらなんでもこれ以上この会話を続けるのは自殺行為だ。しかし、焦りと混乱は予定以外の行動を許してくれない。

「その、人妻、好きなんだ？」

「いや、別に。むしろうちの兄ちゃんが今人妻ブームで、時代は熟女、それも40代後半が」

よく分からないが地雷を踏んだらしい。ただ静かなだけだった教室も、今では冷氣さえ感じる事が出来た。

「う……え？ えーと、さすがに40代後半は無理だなあ」

「僕も無理だよ。大体人妻はそんなに好きじゃないし」

雄二は、自分がなんとなく人妻好きの方に向かわされている気が

してきた。断じてそんな趣味は無いが、今の会話だと若い人妻ならいいと誤解されかねない。とりあえず、これ以上社会的ダメージを受ける前に、早急に会話を終了させる事にした。

「あ、あのさ、その本貸してくれない？」

「いいよ、僕はこっちのくノ一淫魔地獄を読むから」

本を手渡されると同時に次の授業の始まりを知らせるチャイムが教室に響く。雄二は若奥様の蜜壺を手につらふらと自分の席に戻った。

とんでもない大失敗に、雄二は頭を抱えてしまった。どのくらいシヨックが大きかったかというところ、授業中に教科書36ページを読めといわれて

「俊夫の指が久美子の秘められた花園を……」

と、ごく普通に朗読して怒られたくらい。ついでに若奥様の蜜壺は教師に没収されてしまった。

次の休み時間、雄二は行きたくは無かったがまた芳樹の席に向かった。

「ごめん。借りてた本、没収された……」

芳樹はクスクス笑いながら雄二を見ていた。

「いや、別にいいよ。兄ちゃん似たようなのたくさん持ってるし。

それにしても、授業中に読むほど人妻好きなんだね」

それは断じて違っていると雄二が抗議しようとした時、芳樹の隣の男子が話し掛けてきた。

「お前すげえよ。俺授業中笑うの我慢するの大変だった」

また別の男子が寄って来た。

「俺もちよつと鼻水吹いちまった」

いつの間にか、芳樹の席を中心に何人か男子が集まってきていた。

「他にどんなのがあるの？」

「淫乱姉妹報復の館とか」

「なんか親父臭いな」

「じゃあこっちの妖魔戦隊エレクトロンはどう？」

「おー、こんなんがあるんだ」

そこには雄二の望んでいたけど望んでいない風景が広がっていた。ふと雄二は気付いた。ひょっとして自分も仲間とされているのだろうか。

これ以上誤解を受けると、正常な高校生活が送れなくなる、そう思った雄二が自分の席に戻ろうとした時、芳樹の声が聞こえてきた。「あー、人妻好きの人、もう一つ人妻物があつたからこれ貸してあげるよ」

差し出された芳樹の手には、なんとというか邪惡な書物が乗っている。クラス全員が注目する中、雄二は決断を迫られた。

なんとなくいい感じになってきた雰囲気を見捨てて本を床に叩きつけるか、おとなしく受け取るという二重の意味で大人の対応をするか。

「……ありがとう」

雄二は心で泣きながら大人になった。

クラスはこれをきっかけに段々と打ち解けていき、休み時間にあちこちで談笑する光景がみられるようになった。

雄二の願いはかなえられた。いろいろと微妙な犠牲をはらったが、より良い学生生活のためならば

「お、雄二。人妻螺旋地獄のDVD見た？ あれすげーよな」

「……見てない」

「え？ 見てないの？」

すっかり人妻マニアと思われてしまっている。ひどい誤解だ。

「雄二、これ読む？」

芳樹がニコニコと笑いながら、見るからに黒い瘴気が立ち昇りそうな書物を差し出す。

あれから芳樹と仲良くなってしまった。雄二はさらに誤解が加速しているような気がしていた。

だが、いつか誤解は解けるはず。雄二は希望と黒い瘴気が立ち昇る本を手に、輝ける未来へと向かうのだった。

## 第2話：妹の研究・裏

森本芳樹の朝はお弁当作りから始まる。

五個の弁当箱にまずご飯を詰めてテーブルに並べて置いておく。こうする事で湯気をとばし、ご飯がべちゃべちゃになるのを防ぐ。ソーセージに切れ目を入れ、油を引いたフライパンで炒める。兄の分のソーセージは、兄のたつての要望で（自主規制）の形にしていた。

次に卵をボウルに割りいれ、塩と砂糖を入れてかき混ぜる。本来なら出し汁も入れるところだが、忙しい朝なので省略する。

後は冷凍食品をレンジで暖めて弁当のおかずが揃った。

すでにご飯が入っている弁当箱に、見栄えよくおかずを入れていく。

「お父さーん、お母さーん、朝だよー」

芳樹が部屋のドアをノックする。

雀の鳴き声が朝のキッチンまで聞こえてきた。爽やかな早朝の空気が、一日の活力を与えてくれる。

「お兄ちゃーん、お姉ちゃーん、朝だよー」

芳樹が部屋のドアを叩く。

口ひげをたくわえたダンディーな父親と、きちんと三つ編みをした母親がパジャマ姿でキッチンに入ってきた。

その後に見美少年の兄と全身筋肉の姉が、目をこすりながらキッチンに入ってきた。

窓からは昇ったばかりの太陽が、すがすがしい光を浴びせている。芳樹の兄は、自分が座るはずだった席にどっかと腰を落ち着けている姉の巨体を、寝ぼけた顔で見ている。

「……かすみちゃん、そこ俺の席」

「……」

姉は半目でテーブルの一点を見つめたまま、微動だにしない。

「……かすみちゃん、そこ俺の席」

「はあ？ ナニいつてんの？」

「いや、だって、そこ」

姉は細く長いため息をついた後、ゆっくりと口を開いた。

「あんた……ウザイ」

「じゃあ行つてきまーす」

テーブルの上に、四つの弁当箱と四人分の朝食を残して芳樹は玄関へ向かった。

背後から「かすみちゃん、それ俺の弁当」という声が聞こえてくる。

いつもと変わらない森本家の朝の光景を背に芳樹は自転車で学校に向かった。

最初は息が詰まるような雰囲気だったクラスが、今では和気藹々としている。芳樹は学校に行くのが楽しみになっていた。まとまってきたかけがきかけだっただけに、あけすけな雰囲気がクラスに蔓延している。

適当に授業をこなし、いつの間にか放課後。

他の生徒はみんな帰り、芳樹と雄二が他に誰もいない教室でダラダラしている。

「あー、妹が欲しいー」

雄二が椅子の背もたれに体を預けながら呟いた。クラスの雰囲気になてられて、雄二もそういう方面に関して抵抗が薄くなっていた。

「あれ？ 雄二に妹いないの？」

人妻フェチだと思っていた雄二がそんな事を言うので芳樹は少し驚いた。

「いないんだよ。いないから欲しいんだよ」

「なんで」

雄二は立ち上がると、芳樹に向かって、特に意味なく熱弁を振るう。

「いや、なんかいいじゃないか。朝起こしに来てくれる妹とか、お弁当を作ってくれる妹とか」

「ふむふむ」

新しい方面へ雄二が挑戦している。芳樹はそのチャレンジ魂に感心したのと、この高校ではじめての友人という事で協力しようと考えた。

「そうだ、妹が欲しいなら試しに僕が妹の役をやってみようか」

「は？」

「どんなもんか参考になるかもしれないよ」

「どんな参考だよ」

いぶかしげな表情をしていた雄二だったが、暇だったらしく、とりあえず芳樹の提案にのってくれる事になった。

「じゃあお兄ちゃんを迎えに来た妹って感じでやってみるね」

芳樹は立ち上がり教室の出入り口に向かって歩いていく。背後からは戸惑う雄二の声が聞こえてくる。

「意味がよく分からんが、なんか緊張するな」

「よーし、じゃはじめるよー」

そう言つと芳樹はいったん教室から出て行き、手を振りながら入ってきた。

「おー、兄貴ー」

「弟かよ」

醒めた顔の雄二が突っ込みを入れた。

「素で来られても妹とは思いにくいんだが」

「ボーイッシュな妹ということではとかならない？」

雄二と芳樹は先程の反省点を振り返りながら打ち合わせをしていた。

「実はお前も妹がどんなか分かってないだろ」

「うーん……まあ、ねえ。姉ちゃんならいるんだけどなあ」

そつえば今朝の姉ちゃん機嫌悪かったなあと、テンションの

下がりだした雄二を見ながら芳樹は思い出していた。

「なんか無意味な事やってる気がしてきたぞ」

「あ、そうだ。姉ちゃんを参考にやってみるよ。これなら妹に近いんじゃないかな」

「おー、それは近い……のか？」

いまいち納得いかない雄二だったが、芳樹は適当にノリで押してみた。

「よーし、それじゃ行くよ」

「はいはい」

気のない返事をする雄二。芳樹は椅子に座ったまま、頬づえをついてそっぽを向いた。

そのまま何事もなく時間が過ぎていく。雄二は沈黙に耐え切れなかったように芳樹に話し掛けた。

「おい、何かいえよ」

雄二の言葉に芳樹はゆっくりと振り返り、冷たく見下すような目を向けながらけだるそうに言いはなった。

「はあ？ ナニいつてんの？」

芳樹の突然の豹変に、雄二はうろたえた。

「え？ あ、その、何かお気にさわる」

雄二の言葉をさえぎるように、芳樹は細く長いため息をついて口を開いた。

「あんた……ウザイ」

「……ごめんなさい」

特に理由も無く雄二は頭を下げた。

「いやもうなんというか、申し訳ないとか言いようがないな」

「何が？」

芳樹は不思議そうな顔で雄二を見ている。

「というか、お前んちの姉弟関係を見せられて何で俺が謝るんだ」  
今ひとつ納得行かない様子の雄二。芳樹は先日兄が熱心に妹につ

いて語った事を思い出した。

「あつ、そうだ、兄ちゃんが妹についていろいろ話してくれた事があるんだ。それを参考にやってみるよ」

雄二が驚いたように目を見開いた。

「お前妹がいるのか？」

「いや、いないよ。女は一番上の姉ちゃんだけ」

「という事は兄貴にも妹がいないって事だよな……その兄貴が妹について語ったのか？」

「うん」

雄二は額に人差し指を当てて目を閉じた。

「なんか遠ざかっているのか近づいているのかよく分からなくなってきたな」

「それじゃいくよ」

芳樹はそう言つと、雄二の隣に椅子を持ってきて座り、雄二を潤んだ目で見上げてみた。

「……お兄ちゃん」

「な、なに？」

芳樹は手を伸ばすと戸惑う雄二の手をとって自分のおなかにあてた。

「お兄ちゃんの子だよ」

「……」

雄二は凍りついた。

「いやもうなんというか、勘弁してくれって感じだな」

「何が？」

芳樹は雄二を見て不思議そうな顔をしている。

「というか、俺は別にお前の兄貴の闇なんて知りたくなかったんだが」

「闇って大げさな。パソコンのゲームの話だと言ってたよ」

「ああ……そう」

「なんかものすごく熱心に語ってて」

「いやもういいから」

疲れたような様子の雄二。芳樹は何か他に参考になる物はないか、腕組みして考え込んだ。

「うーん、あとは親戚の人くらいかなあ、妹の参考になるの」

「なんか心の底からどうでもよくなってきたぞ」

雄二は一つため息をついた。芳樹の方は気にする様子はない。

「じゃあやってみるね」

「そうね」

芳樹は雄二のそばにやってくると、雄二の頭に手を置いた。

「本当に雄二はいい子だね。私の若い頃はB - 29が」

「戦中かよ」

雄二の力ない突っ込みが入った。

「いやもうなんというか、妹に対する固定概念が覆されてしまったな」

「何が？」

芳樹が不思議そうな顔をしている。

「そもそも誰なの」

「ウメ婆ちゃん確か、曾爺ちゃんの妹だよ」

「それは確かに妹かもしれないが、年上の妹は想定外だ」

疲れたように雄二が机に突っ伏した。その顔に窓から夕日が差し込む。

「ん、今何時だ？」

芳樹は携帯電話の時計を見た。

「五時だね」

「もう五時？　なんて無駄な時間を」

机に突っ伏していた雄二は、立ち上がって鞆を手にとるとさっさと歩き出した。

「帰るぞ！」

「そうだね」

芳樹は雄二の後を追って教室から出て行った。

雄二に追いついた芳樹は気になっていた事を聞いてみた。

「ところで人妻の方は？」

「……いや、本当は人妻好きじゃないんだ」

「なんと」

初対面の人間にいきなり人妻本を貸せといったり、授業中に朗読するなど、かなりの情熱を感じていた芳樹としては寝耳に水だった。

「それで実は妹好きだったと……なるほど」

「……いや、お前の考えているような妹好きじゃないぞ。断じて」

「ああ、そうなんだ。てつきり家族としての妹かと思ったけど。さすが雄二、濃厚だね」

「なんかよく分かんけど、確実に違う」

一つの誤解が解け、新たな誤解が生まれた。

そんな感じで、二人は帰路についた。

### 第3話：弟の研究・裏

森本芳樹の朝はお弁当作りから始まる。

本来なら、今日の弁当当番は姉の香澄だったが、朝の筋トレと言  
って出て行ったジョギングから帰ってこない。

芳樹はため息をついて作業に取り掛かった。

五個の弁当箱にまずご飯を詰めてテーブルに並べて置いておく。

こつする事で湯気をとばし、ご飯がべちゃべちゃになるのを防ぐ。

おかずは……時間も無いので、昨日の残りのカレーをご飯の上か  
らかけて弁当に蓋をする。

「お父さん、お母さん、朝だよー」

芳樹が部屋のドアをノックする。

雀の鳴き声が朝のキッチンまで聞こえてきた。爽やかな早朝の空  
気が、一日の活力を与えてくれる。

「お兄ちゃん、朝だよー」

芳樹が部屋のドアを叩く。

口ひげをたくわえたダンディーな父親と、きちんと三つ編みをし  
た母親がパジャマ姿でキッチンに入ってきた。

芳樹の兄が、目をこすりながらキッチンに入ってきた。姉はいつ  
の間にかキッチンにいて朝ご飯を食べている。

窓からは昇ったばかりの太陽が、すがすがしい光を浴びせていた。

芳樹の兄は、自分の分の朝食をもりもり食べている姉の巨躯を、  
寝ぼけた顔で見ている。

「……かすみちゃん、それ俺の飯」

「……」

姉は弁当にも手を伸ばした。

「……かすみちゃん、それは俺の弁当……カレー!？」

姉は全部かきこんだ後、ゆっくりと口を開いた。

「ごちそうさま」

「じゃあ行つてきまーす」

背後から「かすみちゃん、それ俺のおやつ」という声が聞こえてくる。

いつもと変わらない森本家の朝の光景を背に芳樹は自転車で学校に向かった。

自分が一番下の弟だから、こういう時に面倒臭い事が回ってくる。  
「下にもう一人いればなあ」

そんな事を呟きながら自転車をこぐ芳樹。

学校に着いた芳樹は適当に授業をこなし、いつの間にか放課後。  
他の生徒はみんな帰り、芳樹と雄二が他に誰もいない教室でダラダラしている。

「あー、暇だなー」

生徒が皆帰り閑散とした放課後の教室で、安藤雄二が椅子の背もたれに体を預けながら呟いた。

「妹はもういいの?」

雄二の机の向かいで椅子に座っている芳樹が、手にした文庫本を読みながら訊ねる。

「もういい。やっぱり身内じゃなあ……誰かの所為でなんか不健全な気がしてきたし」

雄二の言葉を聞いていた芳樹は、文庫本から目を離さないまま呟いた。

「僕は弟が欲しいんだよね」

「へー」

雄二は椅子に背を預けたまま、特に興味ないといった感じの気のない返事をした。

「だから弟の役やって」

「ナニゆえ!？」

雄二は予想外の一撃を喰らってバランスを崩し、椅子から落ちた。

「この間妹の役やってあげたじゃない」

「あれはお前がやるって言ったんじゃないか」

雄二は服の埃を払いながら椅子に座りなおす。芳樹はそんな雄二をじっとみて言った。

「でも参考になったでしょ」

「悪い意味でな」

雄二は警戒するような顔で芳樹を見ている。なにか嫌そうな顔をしていた雄二だったが、何か諦めたような顔をして頷いた。

「……それで俺はどうすればいいんだ」

「じゃあまず立って立って」

芳樹に促されるまま雄二はだるそうに椅子から立ち上がる。

芳樹も立ち上がると、頭一つ大きい雄二を見上げた。

「そうだねえ、まずは身長を縮めて」

「……できるか。せめて人間に可能な事を言え」

「じゃあ年下になって」

「聞けよ人の話」

雄二の言葉を聞いてない芳樹は、何かを思いついたように胸の前で手を叩いた。

「そうだ、その場で一回転してみて」

「……こうか？」

雄二は片足を軸にしてくりと回転した。

「そうそう。それで回転しながら、裸エプロン似合う？　って言うてみて」

「裸エプ……なんて事を。ふざけんな」

「えー、うちの兄ちゃんがこの間、僕に理想の弟像を熱く語ってた時に」

「妹でもアウトなのに何を考えているんだ。それとお前の兄貴の闇はいいから」

雄二は嫌そうな表情を隠そうとしない。芳樹はそれを無視して額に手を当てて目を閉じる。

「うーん。それじゃあ、お兄ちゃんの子だよって言うてみて」

「お兄ちゃんの子だ……できるか！　いろんな意味で！」

「えー、うちの兄ちゃんは昼寝してたときに、寝言で僕男の子なのに妊娠し」

「だからお前の兄貴の闇はもういいって言ってるだろ！ 勘弁してください！」

雄二はもう泣きそうな顔をしている。

芳樹は先週兄から聞いた事を思いだした。

「そうだ、兄ちゃんに聞いたんだけど、首輪をした弟はポイント高いつて」

「そんなポイントは燃えないゴミの日に10パーセントオフして還元しろ！」

やや錯乱気味の雄二は意味のよく分からない事を吼えた後、何かに気付いて凍りついた。

「お前、末っ子だったよな……まさか……お前……首輪を……」

「僕？ 兄ちゃんに頼まれたけど、首輪嫌いだから断ったよ」

「そ、そうか」

胸をなでおろす雄二。

「そしたら、俺が首輪するからお前は紐を持ってくれっていわれて二人で散歩に」

雄二がドン引きしている。この程度でどうしたんだろうと芳樹は思う。

雄二はブルブル震えながら、芳樹に尋ねた。

「お、お前、は、は、裸エプロンは……」

「ああそれ？ 兄ちゃんに頼まれたけど断ったよ」

「そ、そうか」

「そしたら、まず俺が手本を見」

言葉の途中で、雄二は両手で耳をふさいだままその場から走って逃げた。

「せるからよく見てくれって兄ちゃんが、あれ？ 雄二？」

夕日が差し込む放課後の教室に一人取り残される芳樹。

逢魔ヶ時から逃げるようにひたすら走る雄二。

「裸エプロンの手本って意味ねえだろ！」  
芳樹の耳に、遠くから雄二の叫びが聞こえた。

#### 第4話：兄の研究・裏

森本家長男、芳樹の兄こと司の朝は華麗に目を覚ます事から始まる。

「眠い……」

昨夜遅くまで『男達の処女宮』と『おなべ対決』というDVDを見ていたため、瞼が重い。

またベッドに倒れこもうとするが、意志の力で踏みとどまる。のんびりしていると、筋肉達磨の姉に朝食を取られてしまう。

司は自らの体にムチを打って、比喻でなく本当にムチを打って自分の目を覚ました。

キッチンに行くと、姉がご飯にふりかけ代りのプロテインをかけていた。

「かすみちゃん、それうまいの？」

「おいしくない」

「ふーん」

司が席に着くと、自分のご飯にもプロテインがかかっていた。

朝食を終えた司は、自分の部屋で制服に着替える。そして鏡の前で自分の格好をチェック。

細くまっすぐな眉、長い睫毛の瞳、すっと通った鼻、可憐な唇。

見た目は世に言う美少年、中身は世紀の大変態が鏡に映っていた。

「よし、今日もいい感じ」

家を出た司は自転車で学校に向かう。学校での司はある意味畏敬の念、というよりも畏怖の対象として見られていた。

一年前、新入生の自己紹介の時、立ち上がった司を見てクラスの大半がうわあ、と感嘆の声を出した。そして司の自己紹介を聞いて、クラスの全員がうわあ……と引いた。

司の伝説はここから始まった。特に夏のプールで女子のスクール水着を着て登場、驚いて詰め寄ろうとした教師が足を滑らせてプー

ルに落下、それを助けようとして一緒におぼれた拳句に人工呼吸を要求した事件は語り草になっている。

今日も実に充実した学校ライフを送った司は、自転車で家に向かっていった。

自転車をこぎながら、司は昨日買って壊したPSSの事を考えていた。あまりの嬉しさに調子に乗って、PSSを亀甲縛りにして天井から吊るそうとしたら、縛りが甘かったらしく途中で落ちて床に激突。一度も電源を入れる事無く天に召されてしまうという失態。

「もつと勉強しないと」

そんな独り言を言いながら司は家に到着した。

「ただいまー」

司が玄関に入ると、靴が二足綺麗に並べてある。

芳樹はいつも靴を放り投げて母親に注意されているのに、どういう風の吹き回しだろうか。

「兄ちゃんおかえりー」

芳樹が玄関へと駆けてきた。

「どうしたんだ芳樹、靴をそろえたりして」

「あ、それ？ 友達がやってくれた」

芳樹が友達を連れてくるとは非常に珍しい。一体どんな友達だろうか。

司がそんな事を考えていると、芳樹の部屋のある二階につながる階段から誰か降りてきた。

「あ、雄二、これ司兄ちゃん」

司はじつと雄二を見た。短めの髪に元気のありそうな顔をしている。なんとなく合格。

「よろしく雄二君。芳樹が友達をこの家に連れてくるのは珍しいな。司は優しい声で雄二に微笑みかける。

「あ、はあ、よろしく」

雄二は何か意表をつかれたような、意外そうな顔をしていた。

「じゃ、雄二、僕の部屋にいこう」

「あ、ああ」

雄二は芳樹の後をついて階段を上がっていく。途中で雄二が振り向いたので、手を振っておいた。

「後でお茶でも持っていくよ」

にこやかに言ってみたが、雄二の表情はますます不可解なものになっていく。

「そんな事しなくてもいいよ」

芳樹は笑いながら司に返事して、二人は階段の上へと消えていった。

司は洗面所で手を洗い、階段を上って自分の部屋に入った。

「ふー、落ち着くー」

ゆるい独り言を呟きながら、司は制服を脱いだ。ふと部屋に違和感を感じる。

ははあ、俺の部屋に入ったな。こういう所で勘の鋭い司は、自慢のDVDコレクションをチェックした。

『きみはぺこ』『奈々8才』『熟女マニア』『ナンパ大作戦』の四つに動かしたような跡が見えた。これは芳樹ではない、芳樹はこんなバラバラなチョイスはしない。するとあの友人という事になる。

「中々有望な友人だな……」

そんな物騒な事を言いながら、司はいろいろと下準備をした後、体操服とブルマに着替えた。それからキッチンにいき、お茶とお菓子を揃えて芳樹の部屋に向かう。

部屋の前でノックしてみる。

「はい、どうぞー」

芳樹の返事の後、部屋のドアを開いた。

「お茶持ってきたぞ」

司の姿を見て吹いてしまう雄二。

「わざわざそんな事しなくていいのに」

「こらこら、何もしなかったらお客さんに失礼だろ」

雄二は何か言葉ををぐつと飲み込んだ。

司は部屋の中にやってくると、雄二と芳樹の前にお盆を置いて、自分もその前に座り込んだ。

雄二の顔がやや青ざめている。芳樹はいつもと変わらない。

「兄ちゃんもここにいるの？」

「お前が友達を家に連れてくるのは珍しいからな」

司はさつさとコップを掴むと、一人先に冷たいお茶を飲んだ。雄二もコップに手を伸ばす。

その時、司は雄二の目が自分の足を見ているのに気付いた。

「ん、気になる？ 今日はお客さんが来てるから剃ったんだ」

「は、はあ」

雄二はあいまいに返事をしながらお茶をちびちびと飲む。

「兄ちゃん足はいつも剃ってるじゃない」

「足？ ヴラインの事だぞ」

そう言つて司はブルマを少しめくつた。

雄二は飲んでいたお茶を霧状にして吹き出した。

「あーあー、雄二大丈夫？」

「げほっ、ごほっ」

盛大にむせる雄二。芳樹は雄二の背をさすりながら司の方を見た。

「そういえば兄ちゃん、今日はブルマが盛り上がってないね」

「ああ、ガムテープでお尻の方に回して固定してるんだ。お客さんの前で恥ずかしい格好は出来ないからな」

雄二は咳き込む中、何か叫ぼうとしているように見えた。

ようやく咳がおさまった雄二は、お茶を飲みながら信じられない物を見る目で司の股間を見ている。

「……っつ」

司が眉間に少し皺を寄せて呟く。

「どうしたの？ 兄ちゃん」

「う……家族以外に見られるのはなんか新鮮で、ちょっと興奮してきて……いてて」

雄二は飲んでいたお茶を唇の端から垂れ流した。

「兄ちゃん、お客さんの前なんですよ？ しつかりしなきゃ」

「いたた……大丈夫だ。こういう時の為に対策は立ててある」

司はそう言くと、足を座禅のような形に組んだ。

「精神統一して煩惱を追いつす」

司は目を閉じた。まるで陶磁で出来た人形のような顔になる。

音の消えた室内。芳樹と雄二は固唾を飲んで見守っている。

ペリ……ペリリ

何かがはがれる音が聞こえてくる。

司は薄目を開ける。油汗をかいている雄二の姿が見えた。

ペリ……ペリリッ！

最後の音に反応して雄二は二階の部屋の窓から外に飛び出した。

バン！ ドスン！ という音の後に、雄二の足音がそのまま遠ざかっていく。

「ガムテープがッ、ガムテープがッ……！」

錯乱気味で走る雄二の叫びが、段々小さくなっていった。

司は一気に剥がれた衝撃と痛みで、体を丸めてうずくまっている。

そのそばで芳樹はお茶を一口飲んだ。

「ふー、落ち着く」

世界は今日も平和だった。

## 第5話：姉の研究・裏

森本家長女、香澄の朝は筋肉トレーニングから始まる。

30キロはある自然石を持ち上げたり振り回したり。ひと汗かいた後、シャワーを浴びてキッチンに行つて朝食や弁当をつまみ食いついつい食べ過ぎておかずが無くなってしまったが気にしない。

朝食を終えたあと、部屋に戻り登校の準備をする。

部屋にある鏡には、180センチ以上の長身と、無闇に広い肩幅、大きい方なのだろうが肩幅の所為でバストというより胸囲と呼びたくなる胸、太い腕、スカートから覗く筋肉の形がはつきり分かる足それら胴体の上には、ベリーショートの髪、きりつとした眉と少年のような瞳、にっと笑った口からは白く輝く歯がまぶしい顔が乗っていた。

適当に格好のチェックを終えた香澄は、徒歩で学校に向かう。

学校での香澄は、頼れる姉御としてそれなりに慕われていた。特にトラブルを力ずくで解決する事には定評があり、クラスメイトが暴走族と悶着を起こした時は20人の暴走族相手に大暴走。相手が乗っていたごついバイクを武器に大立ち回り、全員病院送り。

そんな香澄さんのお昼ご飯。弁当箱を開くと、中には「はずれ」とかかれた紙が貼られているだけ。

弁当を前にしばらく考え込んでいた香澄は、ゆっくりと立ち上がると教室から出て行つた。

芳樹のいる一年の教室に入る香澄。ざわめいていた教室から声が消えた。香澄が教室内を見回すと、芳樹と目が合った。

「あ、姉ちゃん」

「姉ちゃん!？」

芳樹の言葉に、机をはさんで向かいにいた雄二が驚いた。

すっかり静かになった教室を、香澄がのしのしといった感じで雄二達の方へ歩く。

「芳樹、なによこの弁当は」

そう言って差し出した弁当の中には「はずれ」とかいた紙が貼ってあった。

「だって姉ちゃんの所為で弁当が滅茶苦茶になったんだよ。だからはずれ」

「うー……」

言い返せなくて唸る香澄。ふとした拍子に隣にいた司に気付いた。

「司、あんたの弁当よこしなさい」

「かすみちゃん、自業自得なんだから、弟にたかるのはやめようよ」  
「姉に従いなさい！」

香澄は司の襟を掴むとそのまま持ち上げた。司の足が床から離れる。

「かすみちゃん、ちよつとギブギブ」

ふと香澄が芳樹の前に座っている雄二を見た。手の力が抜けた所為で司が床に落ちる。

「誰？」

「いたた、芳樹の友達で雄二君。かすみちゃん、かすみちゃんは迫力がありすぎるんだから、そんなに睨まない睨まない」

司は雄二の方を向いた。

「雄二君、これは俺らの姉で香澄ちゃんっていうんだ。見ての通りちよつと野蛮だけど、中身も野蛮だから気をつけて」

「はあ……よろしく」

雄二はおそろおそろ香澄に挨拶をした。香澄は微笑みながら雄二に話し掛けた。

「ああ、よろしく。それにしてもパンおいしそうだね」

「……はあ」

食欲なさそうに黙々とパンを食べる雄二をじっと見つめる香澄。

「そのパンくれたら私の体好きにしていよいよ」

食べていたパンを豪快にぶちまける雄二。

「かすみちゃん、パンで体売るのはやめようよ」

「あんたは黙ってて。今口説いてる所なんだから」

「かすみちゃん、そんな口説き文句ありえないよ。原始時代じゃあるまいし」

「じゃあ、あんたならどうするのさ」

「俺？ 俺なら……そうだなあ」

司はむせて涙目の雄二の頬に手を添えると、軽く上向きに見つめ合った。

「雄二君……君の（自主規制）俺の（自主規制）口に（検閲削除）」

雄二は涙目のまま思わず司を力いっぱいぶん殴ってしまった。その様子を見ながら、香澄は芳樹に雄二の事を聞いていた。

「彼はどんな子が好きなの？」

「雄二？ 確か妹が好きとか言ってたよ」

肩で息をしている雄二がふと振り向く。香澄は雄二に向かって飛び込んだ。

「おにいちゃああああああん！」

「ぎゃあああああああああ！」

香澄のフライングボディプレスを間一髪かわす雄二。重い振動と共に、香澄の下敷きになった机と椅子がいい感じにひしゃげた。

「ななな何！」

香澄のそばで尻もちをついた雄二が、泡を食ってわめく。

「芳樹！ お前何を話したんだよ！」

「雄二は妹好きって」

「なんかもういろいろと違うぞ馬鹿！」

「じゃあ姉好き？」

「いや、ちよつと待て！」

「……そうだったの」

香澄がゆっくりと起き上がった。

「さあ、この姉とめくるめくひと時を……」

雄二はすでに教室を離脱して校舎圏からも脱出しようとしていた。

「とっつ」

香澄は二階の教室の窓から外に飛び出した。ドスンと大地を震わせて着地した後、雄二を探しにダッシュする。

司は教室の後ろに倒れたままぴくりとも動かない。

残された芳樹は、弁当のうどんをすすった。

「やっぱりうどんだけじゃおかずにならないなあ」

学校に予鈴が鳴り響き、非常に充実しつつもどうしようもない昼休みは、もう終わろうとしている。

世界はやはり平和だった。

## 第6話：霊の研究・前編

雄二達が通う学校の裏手には、旧校舎と呼ばれる木造の古い建物があつた。

昼間から薄暗く、いかにも怪しげな雰囲気から、いろいろと噂が囁かれている。丑三つ時に中に入ると二度と出られない、2階の教室で平安朝の幽霊を見た、実は地下100階におよぶ巨大洞窟がある、などなど。

太陽が傾く黄昏時、180を越える巨体を筋肉に包んだ長女香澄、規格外の変態を美少年の殻に包んだ長男司、普通に見えてあまり普通でない中身を幼い見た目に包んだ末弟芳樹という森本家の三馬鹿と、主に被害者役をやっている安藤雄二はそんな旧校舎の入り口にきていた。

「……あの、司さん、本当にこの中に忘れ物を？」

「……うん、ごめん雄二君。君まで巻き込むつもりなんだけど許してね」

話は、司が昨日クラスの友人達と肝試しに旧校舎に入った事から始まる。昼休みに突入した司達は、まだ日が高いのに途中で逃走。その際司が大事な物を落としてしまったらしい。

取りに戻りたくても怖くて戻れない。しかも友人達は付き合ってくれない。しょうがないので、司が己の人脈をフル稼働させて人員を募った結果、このメンバーが集まった。

「ほとんど身内じゃないですか」

「いや、雄二君、自分でもびっくりしてるよ。他人は意外と冷たいね」

「あんたがヘタレだからそうなるのよ」

見上げるような上から香澄が言葉の暴力を叩きつけた。

「かすみちゃん、ここマジで怖いんだって」

「兄ちゃんかつこ悪い」

下の方から芳樹が言葉の暴力をソフトに叩きつけた。

「さすが芳樹はかすみちゃんに比べて思いやりがある」

「その比較に何の意味があるんですか」

雄二のコメントで天然コントは終了。いよいよ四人は旧校舎に向けて足を踏み出した。

崩れそうな木の扉を開くと、埃臭い空気が外に流れ出してくる。

誰も何も喋らず、校舎内に侵入する四人。

廊下は歩きたびに不快な音を出して軋み、まだ日は差し込んでいるはずなのに思ったよりも暗い。

雄二が司の方を見ると、端正な顔は血の気を失って真っ青、動きも妙にギクシャクしていた。

「司さん、大丈夫ですか？」

「雄二君……手、つないでもいい？」

「……香澄さんをお願いしては」

「かすみちゃんと手をつなぐと、冗談抜きで握り潰されるし」

「……じゃあ芳樹と」

雄二の言葉の途中で、横を歩いていた芳樹が突然後ろに振り向いた。

「うおっ、なんだ芳樹」

驚いた雄二を無視して後ろを見つづける芳樹。

「……何か閉じ込められたような気がする」

「鍵でもかけられたか？」

「うーん、なんか違う」

「よく分からん？」

言葉の途中で、雄二は全身に鳥肌が立っているのに気付いた。司を見ると全身ガタガタと震えている。

「何だこの感じ……」

雄二の眩きと同時に芳樹が前に向き直る。

「うん？ 前から白い煙みたいな人が来るよ」

「……は？」

「あそこ」

雄二は芳樹が指差した先を見るが、薄暗い廊下には空中を舞う埃しか見えない。

前を歩いていた香澄が足を止めた。

「嫌な感じだね。誰かに狙われているような」

「狙われた事あるんですか？」

雄二の間に香澄は苦笑しながら答えた。

「前、暴走族をボコボコにしたら恨みを買ってね、しばらく付け狙われたんだ」

雄二が引きつった笑いを顔に浮かべていると、また芳樹の声がした。

「煙の人五人に増えた」

相変わらず全く見えない。しかし悪寒は確実に強くなっている。

これは確実にヤバイ、雄二の中の何かが全力で警報を出していた。

「姉ちゃんのすぐ前まで来た」

芳樹ののんびりした声とは裏腹に、雄二は喉の奥から叫び声をあげそうになっていた。

「そこにいる連中！　すぐに下がちなさい！」

後ろから鋭い声があがる。司を除く全員が後ろに飛んだ。

風のような物が後ろから前へと吹き抜けていく。

「あ、煙の人消えた」

芳樹が間の抜けた声を出す。同時に雄二は鳥肌が消えているのに気付いた。

声のした方を見ると、雄二たちと同じ制服を着た女生徒が立っている。

一体何者だろうか。雄二はうつぶせにぶっ倒れた司の姿を横目で見ながら考えるのだった。

## 第7話：霊の研究・中編

雄二達の前に突然現れた少女。

司を除く全員が背後の少女に注目する。芳樹とほぼ同じ背丈に、おかつぱの頭、冷たさを感じるつり目、右目は眼科で使われる白い眼帯に覆われている。

「……誰？」

雄二の呟きに、少女はじろりと視線を向けた。

「あなた達何やってるの？」

「いや、あの、忘れ物を取りに……」

香澄は腕を組んで立っているだけ、司はうつぶせに倒れているだけ、芳樹は明後日の方を見ているだけ。対外的な交渉は雄二の手に委ねられた。

「何でこんな時間に？」

「えーと、一緒に探してくれる人を探してたらこんな時間になったとか……」

少女は腰に手を当てると、深いため息をついた。

「誰もいないと思ったから、閉じたのに……」

「……？」

雄二が少女の言葉の意味を考えると、芳樹がのんびりとした声を出した。

「壁からまた煙の人」

場にまた緊張が走る。少女の目が険しくなる。香澄が腕を解いて構えた。

「芳樹、どのあたり？」

「姉ちゃんの右斜め上すぐ」

「はあっ！」

気合一闪、香澄の豪腕パンチが空を切る。音はしないが、何かが破裂したような感じが伝わってきた。

少女の目が驚きに見開かれている。

「……気合だけで霊を散らした？　嘘でしょう？」

少女が信じられない物を見る目で香澄を見つめている。

「姉ちゃん今度は左」

「うらあっ！」

香澄の回し蹴りがやっぱりを空を切り、何かが破裂する。

「姉ちゃんの右斜め前」

「りゃあ！」

香澄の前蹴りが空を切る。

「姉ちゃん、左前方」

「せいっ！」

「ぶごおっ！」

香澄の正拳突きが突然現れた中年男性の顔面にヒットした。いい感じに吹っ飛んで床をすべる中年男性。

「いつ、いきなり何をするんだ！」

鼻血を吹きながら中年男性が非難の声をあげた。香澄が中年男性の顔を凝視する。

「どこかで見た顔と思ったら佐藤先生じゃない。こんな所で何を雄二が香澄の顔を見上げる。

「え、先生？」

「隣のクラスの担任だよ。まったく、芳樹、ちゃんと見ないと」

「え？　見てるよ」

芳樹は佐藤をじつと見ている。

「いたたた。こらおまえ達、こんな所にいないでさっさと帰れ」

佐藤は鼻を手で押さえて立ち上がると、こちらに向かって歩いてきた。

「待ちなさい」

背後から少女の冷たい声が響く。佐藤がぴたりと動きを止めた。

「あなたね、ここに封じられていたモノを解き放ったのは」

「何の話かな」

佐藤の顔から表情が消え、薄暗い雰囲気立ち昇る。

「あなたの後ろにいる悪霊の話よ」

少女が鞆から、細い木の棒に人形の形に切り抜いた白い紙を刺した物を取り出した。

「ほう、御幣を使うのかね」

佐藤がじりじりと後退する。少女は佐藤を睨んだまま一歩前に踏み出す。

「おっと、こいつの命が惜しければ下手な真似はよすんだな」

そう言って佐藤は香澄の後ろに回った。

「その手に持っている物をゆっくりと地面におくぶうー！」

スナップの効いた香澄の裏拳が佐藤の側頭部にクリーンヒット。

佐藤は伸身で二回側転して廊下の壁に激突、トランポリンのようにバウンドして床でもバウンド。

常人ならそこで昏倒するはずが、佐藤は全身をまっすぐ伸ばした姿勢のまま立ち上がった。

役に立たぬ奴め

佐藤の口からは先ほどとは違う、暗く不快な声が発せられている。

「来たわね」

少女の片目に強い意志の力が浮かぶ。

誰かは知らぬが、死にたくなければ去れ

「却下」

少女は冷たく言い放つと、手に持っていた御幣を佐藤の足元に投げつけた。床に御幣が突き刺さり、少女は両手を胸の前で合わせる。

「臨める兵、闘う者、皆陣裂れて前に在り！」

少女の声と共に御幣を中心につむじ風が吹き、佐藤を包み込む。

風が止んだ後、佐藤は白目をむいたまま糸の切れた人形のように力無く床に倒れた。

「ふん、逃げたか……」

少女は倒れた佐藤の近くまで行くと、そばにある御幣を拾い上げた。

「よくわかんないけどあんたすごいね」

香澄が腕組みして感心している。

「かつこいいー」

芳樹が目をきらきら輝かせて少女を見ている。

雄二はとりあえず度肝を抜かれていた。

司は相変わらず。

「そつえば、あんた名前は？」

足元の司をガン無視して香澄が訊ねる。

「……池田、千鶴」

「池田さんかつこいいー」

芳樹はファンになつたらしい。

「池田……さん？」

床から司がうめくように声を出した。

「司さん、起きてたんですか」

雄二が司のそばによつてしゃがみこむ。

「ふふふ、実はずっと起きてたけど腰が抜けて動けないんだ。雄二

君、おぶってくれないかな」

「……香澄さんに頼んだ方が」

「かすみちゃんに体をあずけると死ぬ」

なぜか真剣な顔で断定口調の司に押されて雄二は司をおぶさった。

「司さん、忘れ物もう諦めて帰りませんか？」

「うーん、どうしよう」

雄二と司の会話に千鶴が冷たい口調で割って入ってきた。

「悪いけど、帰れないよ」

「……え？」

木枠の窓から差し込む太陽はもう大分傾いていた。

## 第8話：霊の研究・後編

「悪いけど、帰れないよ」

千鶴の言葉に固まる雄二と司。

「どういう事？」

険しい表情で香澄が訊ねる。

「今日、ここでやる事があるから、誰もここに入れないよう、何もここから出られないよう、界を結んで世界を分けた……んだけど、まさか人がいるとは思わなかった」

雄二の顔にクエスチョンマークが浮かぶ。

「どういう事？」

「あんた達をここにいる奴ごと閉じ込めたってこと」

雄二の背中で司が青ざめた顔を千鶴に向ける。

「あのー、帰りたいんですけど」

「諦めて」

冷たく言い放つ千鶴。

「あたしらどうなるんだい？」

香澄が腕組みして千鶴を見下ろす。

「とりあえず私から離れないで。面倒だけど、確認しなかった私の所為でもあるし」

雄二の背中で蒼白になった司の顔色がどんどん白に近づく。

「あのー、これからどちらへ？」

「職員室」

「はあ」

さっさと歩き出す千鶴の後を、雄二達とはとぼと歩き出した。歩きながら芳樹は、雄二に負ぶさった司の背中をじっと見つめている。

薄暗く埃っぽい廊下を5分も歩いただろうか。職員室らしき物が見えてきた。

「雄二君、おんぶはもういいよ。ありがとう」

司はそういうと、雄二の背中から降りる。廊下に足をつけるとギイと軋む音がした。

「大丈夫ですか？」

「さすがに腰の抜けたのは治ったよ」

青い顔でにやりと笑いながら話す司。

「さて」

千鶴が職員室の扉の前で雄二達の方に振り返った。

「今から私はこの中に入るけど、あなた達はここでじっとしてていい？」

それだけ言うと、千鶴は返事を待たずに職員室の扉を開けた。

オン・キリキリ・オン・キリウン・キャクウン！

背後から強い声と壁のような何かがぶつかってきた。雄二達全員がまとめて職員室の中に倒れこむ。

「ななな何！」

驚いて雄二が立ち上がろうとするも、何かに縛り付けられたように体が動かない。

「えっ、あれっ？」

「油断した……そこにいたのね徳井忠典」

千鶴の言葉に扉の方を見ると、そこには司が一人立っていた。

ほう、儂の名を知っておるとは

司の口からは、あの時の佐藤と同じ声が聞こえてくる。薄笑いを浮かべた司はゆっくりと雄二達の方に近づいてきた。

「いつ憑かれた？ 私が気付かないはずは」

くっく、昨日だよ。こやつがここに来たのでな、贅集めに使わせてもらった

司の背後から黒い陽炎のような物が立ち昇り、司の体を包む。するとボロボロの僧衣を着た僧形の男が現れた。

雄二は目だけ動かして千鶴を見る。

「……贅って？」

「あなた達、いや私達のことね」

「……どうなるんですか」

「黙ってて、今考えてるから」

千鶴は懸命に手を動かそうとするが、びくとも動かない。

無駄だ無駄だ、儂の不動縛呪を解こうな

「うらああああ！」

言葉の途中で香澄が強引に立ち上がった。音はしないが、空間で何かバキバキと壊れる感覚が伝わってくる。

そのまま香澄は徳井に向かって大きく踏み込み右フック。まともに喰らった徳井は棒きれのように宙を舞い、石ころのように転がった。

「……呪が弱まった！」

千鶴はどうにか胸の前で手を合わせた。

「ひふみよいむなやこと、ふるべゆらゆらと、ゆらかしたてまつる！」

千鶴の声と共に全員の体を押さえつけていた何かが消えた。千鶴は鞆から、白い人型を細い木の棒にさした物を二つ取り出した。

「春は呼ぶ、夏は言う、秋は哭く、冬は呻く、急ぎ律令に従うべし！」

声と共に投げつけられた御幣は、途中でできりもみしながら見えなくなった。

ようやく起き上がった徳井は、余裕の表情で千鶴を見据える。

くはは、式を使いおるか。だがその程度では儂をぶっ！

千鶴に注意を向けた徳井に、死角から香澄の胴回し回転蹴りがヒツト。床に叩きつけられた徳井は、派手にバウンドして壊れた人形のような格好で吹っ飛んだ。

そんな超常対戦を呆然と見守る雄二と、池田さんファイターと応援している芳樹の足元に、何枚もの人型が差されている木の棒が四つ投げられてきた。

「……？」

二人が顔を見合わせていると、千鶴が徳井から視線を外さずに小さな声を出した。

「それを部屋の四隅に一つずつ置いてきて。気付かれないようにね」二人は御幣を二つずつ拾うと、中腰で音を立てずに歩いていった。その頃主戦場では、徳井が香澄の猛ラッシュと式神の攻撃に押されていた。

おのれ、こざかしい！

徳井は香澄のリアートを空に飛んでかわした。

くはは、ここまでは届くまい

空中の徳井は両手で印を結んだ。

オン・バザラギニ・ハラチハタヤ・ソワカ

徳井の前で、何かがぶつかって弾けた。折れ曲がった千鶴の御幣が下に落ちていく。

式など儼にとつては玩具に過ぎぐべっ！

空中の徳井の顔面に、職員室の机がヒット。爆発したようないい音がした。

……まずはお前をどうにかせねばならんか

鼻血を吹きながら徳井は両手で印を結んだ。

ナウマク・サマンダ・バザラダン・カン！

徳井の周囲に炎が渦巻き、香澄に向かって疾走する。千鶴が鞆から豪華な御幣を取り出し香澄の足元に投げつけた。

「風は返りて北に吹く、急ぎ律令に従うべし」

香澄の足元の御幣を中心につむじ風が吹き、その風に乗って炎が空中の徳井の元へ返っていく。

ぐおっ……呪詛返しかつ！今の世に貴様のような使い手がのこっ！

壁を経由した香澄の飛び蹴りが徳井のわき腹にヒット。徳井は綺麗な字の格好で向かいの壁に飛んでいった。

「全部置いたぞー」

「こっちも終わりー」

雄二と芳樹の声が職員室の隅から聞こえてきた。

「よし、ちよつとの間持ちこたえて」

千鶴はそう言つと、胸の前で二回手を打ち鳴らした。

「天清浄、地清浄、内外清浄、六根清浄と被い給う」

千鶴の声が職員室を覆つていく。

この部屋を浄化する気が……させぬ！

千鶴に向かつて手を伸ばした徳井に、香澄が大きくしゃがんで踏み込み、背中で体当たりを仕掛ける。

くっ

間一髪でかわし、空中に逃げる徳井。

ええい、貴様にはこれをくれてやる！

そう言つて徳井は懷から細い管を取り出し、香澄に向かつて投げつけた。

香澄はその管を手で払う。管が地面に落ちると同時に、香澄の動きが止まった。

「くっ……」

くはは、管狐が憑いたな。さあ、我が下僕になるがいい胸を押さえていた香澄は、両足で床を踏みしめると、腕を胸の前で交差させ、大きく息を吸い込んだ。

「かああああっ！！」

香澄の声が職員室の空気と壁を震わせる。その後細く小さい獣の悲鳴がしてそのまま消えていった。

徳井は笑いが貼りついた顔のまま止まっている。

気合だけで体の中の管狐を消したと……？

徳井の表情が歪む。

馬鹿か！ おまえは！

理不尽な状況に意味不明な台詞を吐いてしまう徳井。

「小男鹿の、八の御耳を、振立て聞しめせと申す！」

千鶴の言葉が終わり、部屋の四隅に置かれた御幣から白い柱が立ち昇った。

しまった！

そして白い柱の間に白い壁が現れ周囲を覆う。息苦しかった部屋の空気が明らかに変わった。

徳井は糸の切れた人形のように膝から床に崩れ落ちる。床に倒れた徳井の姿が薄れていき、中から司が現れた。

くつくく、まさかこれほどとはな

倒れた司から徳井の声が聞こえてくる。

「四角四界……ここはもう聖域よ。あなたのような悪霊は存在出来ない」

千鶴が片目の鋭い視線を倒れた司に注ぐ。

くはは、確かに霊の状態ならばひとたまりも無かつたろうが……今僕はこいつに憑いておる

「諦めなさい。抵抗するなら無理矢理引きずり出す」

千鶴が御幣を一つ掴む。

くはははは、僕は消えるわけにはいかん、いかんのだ  
いつの間にか、倒れた司の周囲に雄二たちが集まってきた。

そうだ、僕は消えるわけにはいかん。この世にブルマを復活させ、その全てを引き摺り下ろすまで

「……？」

全員の顔にいぶかしげな表情が浮かぶ。

ブルマ？ そんな事よりも脱ぎたてのスクール水着を絞ってコーヒーを淹れたら売れそうだ。何をいつとるのだ僕は

千鶴の片目にあきらかな侮蔑の光が浮かぶ。

スクール水着とはなんだ！ そんな事よりも、半ズボン少年の足の付け根の隙間を激写！ 何だこの邪悪な光景は！

雄二の顔にドン引きの文字が見える。

もう半ズボンは古い！ これからはスパッツだ！ なんだそれは！

香澄は両手の拳をバキバキ言わせている。

おお、今日は『見た目はカレーライス』のDVDの発売日だ。何

だこの知識は

「あ、それ延期になったよ」

芳樹は訂正した。

何だ、何だこの記憶は、僕は誰だ、搾乳プレイ？ 知らぬ！ 僕はそんな名前ではない！

司は顔を上げ、千鶴を見た。

おお、お前には首輪をして、後は白い靴下だけ履かせて（検閲削除）

千鶴は表情を変えずに両の耳を手でふさいだ。司は次に雄二を見た。

お前は（検閲削除）便所で（検閲削除）拘束具で（検閲削除）最後に（検閲削除）

雄二は後ろを向いてしゃがみ、両手で耳をふさいだ。

誰だ、僕は何だ、いやだ、消えたくない、飲まれる、黒い渦に飲まれる

司は最後に細く小さい叫び声をあげた。

「……消えた」

耳から手を離れた千鶴が呟く。

「消えた？」

ようやく振り返った雄二が千鶴の方を見る。

「依り代の人のだス黒い何かに飲まれた……多分」

よく分からないうちに解決したようなので、皆は旧校舎の外に出る事にした。司は雄二が背中に乗せ、途中で回収した佐藤先生は香澄が肩に担いだ。

旧校舎の門のところで、千鶴は両手をあわせて一回打ち、地面に刺してあった御幣を抜いた。

「これで出られるよ」

外に出ると、すでに辺りは暗く、電灯があちこちについている。

「そつえば、あの徳井って人はなんなんですか？」

司をおぶった雄二が千鶴に訊ねる。

「昔の拝み屋さんよ。たくさんの人を呪い殺して、あげくに自分が殺されちゃった人」

風が吹いて千鶴の髪をかき乱す。

「あんまり恨みが強いから旧校舎が出来る前の場所に封じられていたんだけど……佐藤先生が解いたみたいね」

千鶴は歩く方向を変えた。

「じゃあ、私はこの辺で。それからあの旧校舎はもう入らない方がいいよ」

雄二達は、電灯の明かりに照らされて遠ざかっていく千鶴を静かに見送った。

あと、実はボコボコにやられていた司（主に姉）は即座に入院。一週間ほど生死の境をさまようことになった。

## 第9話：患者の研究・前編

よく晴れた青空の下、全身打撲（主に姉のせい）で病院に入院中の司を見舞いに、雄二と芳樹は病院に向かっていた。

「何で俺まで」

「いいじゃない、兄ちゃん喜ぶよー」

雄二は放課後芳樹に捕まり、しぶしう病院へ自転車を走らせていた。

二人の行く手に、白い建物の大きな総合病院が見えてくる。

「あそこ？」

「そう、兄ちゃんが入院中」

駐輪場で自転車を止めた二人は、受け付けで司の部屋を聞いた。

司の名前を出した時、受付のお姉さんの顔が引きつったような気がした。

二人はとりあえず場所を聞いて、そこへ向かうべく階段を昇った。お見舞い品は、雄二が途中の青果店で買ったバナナ、芳樹は得体の知れない雑誌だった。

「まあ、あえて何かは聞かないけど、病院にそんな物持ってきて大丈夫なのか？」

「多分大丈夫じゃないかなあ。前の時は何とも無かったし」

「前？」

司は以前にも入信した事があるのだろうか。そう思った雄二は訊ねてみた。

「前というと、ここに入院するのは初めてじゃないのか」

「兄ちゃん？ 二回目だよ」

「前はどんなのだったんだ？」

芳樹は病院の廊下を歩きながら、少し考え込んだ後口を開いた。

「うーん、確か6年か7年前に、学校の2階から落ちたんじゃなかったかな」

「2階？ 何でそんな所から」

「女子の着替えを覗こうとして」

「そんな前からそんなのなのかあの人は。というか、その頃小学生だろ」

「僕の知ってる兄ちゃんはずっとそんなのだよ」

芳樹はさらつと言つてのけた。

そんな感じで歩きながら談笑していると、森本司のプレートの入った部屋についた。

「ここか。相部屋なんだな」

「前も相部屋だったけどね」

二人は部屋に入り司の姿を探す。

窓際のベッドに、あちこち包帯に覆われた司がぼんやりと外の風景を眺めていた。

「兄ちゃん、見舞いにきたよー」

芳樹が司のベッドに駆け寄る。

「こら病院内で走るな」

雄二が突っ込みを入れながら歩く。

「おやいらっしやい」

外を見ていた司がこちらに顔を向ける。今まで見えなかった方の顔が腫れ上がっていた。

「兄ちゃんどうしたのさその顔」

「ああこれ？ 看護師さんに剃ってもらおうと脱いで待ってたらかすみちゃんが来てね」

「……」

沈黙する雄二をよそに、司は芳樹達の訪問を喜んでいようだった。

「いやー、病院は退屈だねー。話し相手が欲しかったんだよ」

「はあ」

ニコニコと笑う司を見た雄二は、さっさと見舞いを済まそうとバナナを差し出した。

「これ、見舞いです」

「おお、バナナかー。ありがとう雄二君、これで君に悪戯しろという事だね？」

「違います」

妙にテンションの高い司とは対照的に、沈んでいく雄二。

「受付の人の反応がおかしかったんですけど、何かやったんですか？」

「雄二君、いくら僕でも入院中においたはしないよ」

片方が腫れ上がった顔でにつこりと笑う司。

「本当ですか？」

「本当だって。まあ、あえて言うならムダ毛の手入れを頼んだくらいかな」

「ムダ毛？」

雄二の言葉に、司は笑いながらズボンを下ろした。

「この毛」

「……」

ずっと視線を外して数秒の沈黙の後、うつむいた雄二が絞り出すように声を出した。

「……それ、犯罪じゃないですか」

「えー、前の時はみんな笑ってくれたんだけどなあ」

「前というと、6、7年前の奴ですか」

雄二の言葉に、司は少し驚いたような表情を見せた。

「よく知ってるね。そうそう、当時10歳。もてもてだったよ」

「今は17歳ですよね」

「うん17歳」

うつむいた雄二が絞り出すように声を出した。

「……やっぱり犯罪じゃないですか」

「まあまあ雄二君、細かい事を気にしていると第二次性徴がこないよ」

「……もう来てます」

二人がショートコントを展開している間、芳樹は司のベッドの上に勝手に寝転んでいた。

「あ」

天井を見ていた芳樹が、何かを見つけて声を上げた。

「兄ちゃん、あのお守り……」

芳樹の声を聞いた司が、同じく天井を見上げる。視線の先で、カーテンのレールに少しぼろくなったお守りが吊るされていた。

「ああ、さっきかすみちゃんに持ってきてもらったんだ」

そのお守りを見つめる司の目に、いつもとは違う何かを感じた雄二は司の顔を見ながら訊ねた。

「あのお守りは……？」

雄二の言葉を聞いた司は、一瞬遠い目をした後、ベッドの端に座って語りだした。

「あのお守りはね、今から7年前。僕がこの病院に入院していた頃、友達にもらったんだ……」

## 第10話：患者の研究・中編

病室の窓からは高いコンクリートの塀が見える。

あの向こうにはどんな空があるんだろう。

僕はベッドの上から灰色の壁の向こうを、向こう側の青い空をいつまでも眺めていた。

「一号、行きます！」

かすかに消毒薬のにおいがする病院の廊下。少女のような顔をした少年が、突然走り出した。その先にはまだ若い女性の看護師が無防備に歩いている。

「たあっ」

少年は看護師の足元まで来ると、仰向けにスライディング。

「きゃあ！」

「よし、白いパンンンンン！」

少年は仰向けのまま階段に頭を一定のリズムでぶつけながら滑り降りていった。

「司君」

「はい」

診察室の中で、頭に包帯を巻いた司は神妙な顔をして初老の医師の言葉を聞いている。

「病院で怪我を増やすのはやめてくれんかね」

「わかりました」

医師は司の言葉を聞くと、細い眼をさらに細くして目の前の少年を見つめた。

「君はこの間もわかりましたと言って、盲腸でもないのに自分で剃って怪我してるじゃないか」

「あれは4号室のさゆりちゃんが剃るところ見たいっていうから」

「3歳の子供に何を見せるつもりだったんだね」

「いや、剃りあをと……」

「司君、君はそもそも生えて……はあ」

初老の医師はため息をつく、もういいです気を付けてください、  
といって司を診察室から追い出した。

「ちよつと痛い。次は気をつけないと」

「にいちゃん」

診察室のドアの前で司が包帯を巻いた頭をなでていると、背後から聞きなれた幼い声がした。

「お、芳樹、来たか」

司が振り向くと、バナナを両手に一本ずつ持った少年が駆け寄ってくる姿が見えた。

「にいちゃん入院おめでとう。はいバナナ」

無邪気な笑顔で兄にバナナを手渡す芳樹。

「よくやった芳樹、いいアイテムだ」

言葉の意味をあまり気にせず笑顔でこたえる。司は手の中のバナナに視線を落とすと、何かを考え込むように静かになった。

「……よし、つぎはこれだ」

「これ？」

不思議そうに兄の顔を覗き込む芳樹を無視して、司は颯爽と病院の廊下を歩きだした。

「兄ちゃん何やってるの？」

「静かにみている」

芳樹の不思議そうな顔をよそに、司はバナナの皮をもって女性看護師の背後にゆっくりと近づいて行った。

「今だ！」

司は叫ぶと同時にバナナの皮を女性看護師の足元に投げ、同時に仰向けスライディング。

「きゃあ！」

「よっし、黒べぶ！」

滑り込んだ司の顔面に女性看護師のかかどが振り下ろされた。

「あっ、ご、ごめんなさい！ 大丈夫？」

「らいじょうぶれふ」

ゆっくりと立ち上がり、端正な顔の下半分を赤く染めながら司は笑顔でこたえる。

「で、でも、ちょっと先生に診てもらいましょうか」

「いえ、それにはおよみまへん。ひつれいひまふ」

「あっ、ちよつと」

司は声に背を向けて駆け出した。またあの先生の嫌味を聞くのはまっぴらごめんだった。

「よしひ、ほい！」

「どうしたの兄ちゃん顔が赤いよ」

状況をよく理解していない芳樹の手をひっぱり、病院の廊下を走る司。

「ちよつと待つてー、待ちなさーい」

背後からは被害者兼加害者が廊下に赤い足跡を残しながら追いかけてくる。

「まふいな、かふれないと」

司は芳樹の手を引いて近くの病室のドアを開けて飛び込んだ。

素早くドアを閉め、息を殺す。足音がドアの前を通り、そのまま遠くなる。

「……ひつたか」

「え？ うんこ？」

「しずかに」

司は芳樹の頭をなでて、だいぶ腫れのひいた自分の唇に人差し指を当てた。

落ち着いてから周りを見ると、薄暗い部屋だった。

奥のベッドには誰かが上半身を起し、背を向けて窓の外を見ている。

「ああ、勝手に入ってごめんね、すぐ出て行くから」

窓を見ていた誰かがゆつくりと司たちの方へ振り向いた。

綺麗だった。司も美少年と呼ばれていたが、それよりも綺麗だった。

ぼんやりと乾いた鼻血をつけたまま見つめる司。

ベッドの上で形のいい唇が動いた。

「……誰？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1836c/>

---

人々の研究

2010年10月9日20時40分発行